

5 災害への関心を持つことで何が変わるのか

日本列島は位置的にも特異な自然現象が発生する環境にあることから災害は避けられない素因を有しています。そして、最近になっての気象の変化が著しいことや都市化が進んでいること、山村部の農村や森林環境の管理状況は利用の変化、人材難、高齢化などの社会変化があつて国土管理が十分でないことなどが複雑に関連しています。

したがって、毎年どこかで地震、津波、火山噴火、土砂災害、洪水氾濫が発生して被害発生が絶えません。災害現場や報道等によく聞くのは、想定外だったとか、これまでは大丈夫だったというようなことですが、自然災害は必ず発生する理由があります。

ただし、自然災害は一つの素因と誘因で起きるものではありませんし、社会の構造とも深く関係する不定性なものです。したがって、予測や想定が難しく、ハード対策だけでは不十分でソフト的な対応を同時に行うことで被害を最小にすることができるというものです。そして、災害対応は科学的な知見は欠かせませんし、これまでの経験も大切ですので、これらを重ねながら可能な限りの対応が必要となっているものです。

それだけに、他域での災害例は対岸の火事ではありません、自分の地域におけるシミュレーションをして、新しい知見を取り入れながら地域防災力の向上と住民同士の情報共有が大切なこととなります。これらの行動がまさに、自然災害への関心を持つということになります。不幸中の幸いというか、災害事例は忘れないうちに起きていますので、傍観しないで話題にさせていただくことも有効な学びにつながります。

また、実際には科学の限界や性質などの科学に関する知識を社会のかかわりの中で理解することが求められていると思います。そして、個々の科学の知識だけでは、様々な社会の諸問題を解決することはできないということが現代の科学リテラシーの基本になっています。今後の社会は工業化社会から情報化社会へと展開していく先は定常化社会に移行するといわれ、その中では科学技術は独立したものではなく、むしろ社会との関係の中で評価されていくことになると思われれます。社会構造の変化は科学技術の在り方に無関係ではないし、その大きな背景に科学の卓越性と不定性にあるということになります。

そして、科学的知識を活用するためには、不定性への理解が欠かせませんが、社会的判断(科学技術の価値化)では、不定性をテーマにした人文・社会科学の視点も欠かせないものになります。つまり、科学技術相互の学際領域が重要なことは論を待たないわけですが、加えて、社会との関係が極めて重要なことであることに意識的に視野を広げていかないといけないことです。安全で安心、快適な暮らしを継続維持していく環境を構築するためにも、専門家と市民が同じ視点でものを考えていくことが必要になってくることは間違いありません。そういう意味でも災害への関心を持ち続けていくことは大変大切なことになります。

